

3 昨年度までの研究の振り返りと今年度の研究内容

昨年度までの研究について、①子どもの意識調査、②職員の振り返り、③講師の先生方からの助言、という3点から振り返り、考えられる成果と課題は次の通りである。

<成果>

- 学習材を選定する際に、年間（単元、長期的なスパン）を見通して、どのようなゴールを目指していくのか、ということ子ども自身の言葉で整理していくことで、そのために、当面どのような活動（小単元、中期的なスパン）が必要になるのか、ということ子ども自身が捉えることができた。それによって、一時間一時間の目的や意味をはっきりさせながら体験や話し合いに臨む姿が見られた。子どもの意識調査では、当面の活動目的を捉えながら学習活動に臨むことができている子どもの割合が増えてきている。
- 『学びを創りだす力』の掲示物を各教室に掲示し可視化したことで、教師が総合以外の教科等においても、資質・能力及び態度の面から一時間の授業の中で目指す子どもの姿について考えようとする場面が増えてきた。また、子ども自身の振り返りの中にも、『学びを創りだす力』について言及する内容のものが見られるようになってきた。
- 子どもへの意識調査を見ると、学習活動の中で知っている思考ツールの種類や活用する場面が増えたと感じていること、またその結果、思考ツールを用いて話し合ったり考えたりすることがわかりやすい、と感じている割合が増えてきている。また、子どもの学習を板書として整理する際に、思考ツールを効果的に活用することによって、子どもが一時間の学習を通して何を考えたのか、何を学んだのか、ということ捉える助けとすることができた。具体的には、振り返りを書く際に、板書を手掛かりにしながらかえる姿が多く見られるようになった。

<課題>

- ▲子ども自身が、学習材を選定しゴールまでの見通しをもつことができるようになってきている一方で、その方法が形式化してしまっていたり、失敗しないために消極的な選択をしてしまったりする場面が見られるようになってきている。思いや願いをもって、主体的に問題解決に向き合っていくように、学習材を選定していく場面をより丁寧に行う必要がある。
- ▲教師自身の教材研究が不十分なため見通しをもてず、課題があいまいになることがあった。よりシャープで具体的な課題（やることははっきりして、学びがあり、追究後の振り返り方が明確）を設定できるようにするためには、学習材を通して、どのような学習活動が期待できるか、どのような内容にせまることができるか、ということより深く分析し、学びどころを考えながら単元を構想する必要がある。
- ▲教科関連について具体的な取組としては、掲示と意識化させるための声かけ等にとどまっているため、結果として関連し横断的に培っている力を示すことはできたが、意図的・効果的な指導の在り方がまだ十分に練られていない。『学びを創りだす力』を掲示することで、他の教科等と、育てたい資質・能力及び態度の側面から関連付けて指導できる部分があることは見えてきた。年度初めや長期休業中に、各学年の教育課程全体を見ながら、どのような関連が図れるのか、考えていきたい。
- ▲思考ツールの活用については、板書でまとめる場面で有効に活用できたが、ともすると教師の意図が出すぎてしまう場面もあり、真に子ども自身が主体的に思考・判断することができていたか、見直す必要がある。思考・判断そのものを、より子ども自身のものにしていくためにも、思考ツールを目的に沿って効果的に活用できるような方法や学習集団の在り方について、さらに考えていきたい。

また、昨年11月に発表された諮問文「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」にて、『アクティブラーニング（＝課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習）』というキーワードが挙げられた。そこで述べられていることは、本校がこれまでの実践・研究の中で追究してきたものである。そこで、上記の課題も踏まえ、これまでの研究の中で大切にしてきたことを改めて見つめ直し、その意味や価値を確認するとともに、さらなる生活・総合の充実を目指し、特に、ア「主体的な追究」、イ「資質・能力の育成」の実現に向けて、今年度の研究テーマ及び内容を次のように設定した。

研究テーマ

『アクティブラーニング』の視点から考える戸部のこれまで・これから

研究内容1 子どもが意欲的・主体的に追究を持続できるような学習材の分析と単元構想

視点① 「子ども」と「学習材」とのかかわりの見極め→ア「主体的な追究」

視点② 『学びうる内容』と『学びどころ』の分析→イ「資質・能力の育成」

研究内容2 子どもが主体的に課題解決に取り組み、力を身に付けられるような授業の工夫

視点③ 『学びを創りだす力』をベースにした積極的な教科関連→イ「資質・能力の育成」

視点④ 思考ツール・学習集団の工夫→ア「主体的な追究」、イ「資質・能力の育成」

4 今年度の研究内容を具現化するための具体的な視点

研究内容1 子どもが意欲的・主体的に追究を持続できるような学習材の分析と単元構想

視点① 「子ども」と学習材とのかかわりの見極め

これまでの研究の積み重ねの中で、総合で大切にしたいことについて子どもと共有し、条件を設定する等、子どもと共に学習材を選定し、単元を立ち上げるスタイルが確立されてきた。子どもたち自身が興味・関心のある事を出し合い、その価値を自分たちなりに判断することができるようになってきている。その原動力は子ども自身の「良い総合にしたい！」という思いである。しかし、その裏には「失敗したくない。」「好きなことをやりたい。」という思いがある。子どもは経験を通して、どうすれば充実した学習になるのか知っている。そのため、その枠の中で考えようとする。また、自分たちの興味・関心のある事を学習材として選定していくためには、どのような目的をもって、どのような活動に取り組みばよいか知っている。ともすると、「器用」に「上手」に学習材を選定しかねない。教師は、子どもたちの学習材の選定が一つの方向に収まりそうになると、安心してしまいがちだが、そこで子どもの本気度を見極める必要がある。そのためのポイントについて考えたい

Point1 「子どもが持ってきた学習材は、その子どもにとって生活や経験に基づく真に興味・関心のあるものになっているか。思い付きで発言しているものになっていないか」

近年子どもから上がる学習材の傾向を見ると、「表現」と「食」の二つに偏っている。それは、小学校の中・高学年という発達段階の子どもたちにとって楽しそうな、魅力的なものであることは想像に難くない。もちろんそれ自体が問題なのではなく、本気で取り組む人や地域に息づく背景のある魅力的な学習材もある。しかし、子どもは「これまで先輩たちが取り組んでいない、何か新しいものにチャレンジしたい。」という願いも持っている。そのため、インターネットの動画サイトでたまたま見つけたパフォーマンスや、地域に新しく出店した飲食店等に飛びついてしまうこともある。そして、「上手な〇〇で地域の人を楽しませたい。」「おいしい〇〇で地域の人に喜んでほしい。」と発言する。これまで取り組んだ活動の流れを想起しての発言であり、子どもたちはそれで「いける！」と考える。しかし、新しい表現にチャレンジすると、子どもにとって経験したことのない難しさが立ちはだかる。また、思っていたような協力を得られないこともある。そうした問題に遭遇した時に、子ども自身が材に対して強い思いをもっていれば、大きな成長の場面となるが、そうでなければ、活動への意欲は失われていく。教師は、子どもの発言を鵜呑みにすることなく、「なぜ、その材に魅力を感じているのか」ということをしっかり問い返していく必要がある。

Point2 「子どもが持ってきた学習材は、本当に地域とのつながりが期待できるか」

戸部の地域の方は、子どもたちの活動を温かく受け止めてくれる。それは、何でも「いいよ」と言ってくれるような甘さではなく、子どもたちの活動が足りなければ適切で厳しい助言をしてくれることもある。そして、子どもたちを学校と一緒に育て、成長していく姿を優しく見守り、価値付けてくれる。子どもはそのような地域の方とのかかわりを通して、「地域の人とかかわれば総合が深まる」という実感も持っている。それが「上手な〇〇で地域の人を楽しませたい。」「おいしい〇〇で地域の人に喜んでほしい。」という発言にもつながっている。しかしそれは、子どもたちの総合に地域の方を「付き合わせる」ことになりかねない。そこで、教師は、それらの子どもの発言が経験に基づく安易な発想で使われているものになっていないか、見極めなければならない。今年度は、「本当にそれは地域とのつながりが期待できるのか、本当に地域の方が求めていることにつながるのか、本当に地域にとって有益なことなのか」ということを問い返していく必要がある。

以上の2つのポイントを意識し、子どもが材に対して持っている思いや願いをしっかりと引き出したり、子ども自身に材の価値を考えさせたりすることで、子どもが「本気」で向き合える学習材を選定できるようにしていきたい。また、ここまで、話し合いを通して学習材を選定する場合について述べてきたが、もちろん、出会わせ方を工夫しながら、教師から学習材を提示したり、まち探検等の共通体験を通して学習材を探したりするような方法にも、これまでと同様に取り組んでいきたい。

視点② 「学びうる内容」と「学びどころ」の分析

子どもが本気で向き合えそうな材が見えてきたところで、教師自身も教材研究を深めていかなければならない。子どもが本気で学習材と向き合い、学習材に対する様々な思いや可能性を話し合っていく中で、教師自身も「よし、これでいけそうだ！」という手ごたえを感じ、子どもと同じ段階で思考がストップしてしまえば、子どもに『学びを創り出す力』を育成し、『学びうる内容』にせまるような学習にはなっていない。そこで、教師の教材研究の在り方について段階的に考えていきたい。

Step1 協働的・拡散的に学習材の可能性について探る

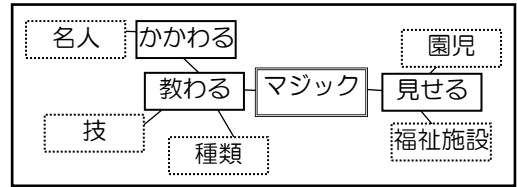
子どもは、自分たちに見えている事実や経験の範囲で学習材について語り合う。教師はそこから一歩進んだ教材研究を行う必要がある。教師自身も、これまでの経験の中で、「まずは～して〇〇に気付き、その後～することで、〇〇を感じ取り、最終的に～して〇〇しようとする」といった形で、子どもと学習材とのかかわり方の視点で教材研究をしまいがちだが、今年度はそうした形にとらわれず、まずは学習材の可能性について、拡散的に、ありとあらゆる可能性を探っていくことを大事にしたい。具体的には、KJ法的な手法やウエビング等を用い、①「何が、どのようにできるか」という活動の可能性と、②「何を、誰と」という対象の可能性を考えていく。その際には、学年の発達段階や価値があるか、ということから視野を狭めることなく、実際に大人の社会でその学習材とかかわるとしたら、どのような営みがあるのか、

ということや良い側面だけでなく、負の側面にも目を向けて考えていきたい。そうすることで、より深い学習活動の可能性が見えてくる。こうした作業を行う際には、一人で行うのではなく、低・中・高のブロックや、場合によってはそれを越えて協働的に行っていきたい。

Step2 『学びを創り出す力』『学びうる内容』を整理する

前述の通り、学習材の可能性について探る際には、「学習活動」と「対象」の二つの視点で行う。それは「学習活動」は『学びを創り出す力』に、「対象」は『学びうる内容』につながっていくからである。

例えば、「マジック」という学習材について「名人とのかかわり」という学習活動を考えたとすれば、インタビュー等の音声言語や、名人の技の観察による情報収集の力や、わかったことをもとに、技とそのポイントとを関連付けながら整理する分析的な思考力等の『学びを創り出す力』が身に付くと考えられる。また、「園児や福祉施設」という対象からは、年少者や高齢者に対する理解が深まり、かかわり方を見つめ直そうとする福祉的な『学びうる内容』が期待できると考えられる。



このようにウエビングを通して見出した可能性をもとに、子どもにとって価値のある(=『学びを創り出す力』につながる学習活動、『学びうる内容』につながる対象)を判断することが教師には求められる。

Step3 『学びどころ』を整理し、単元を構想する

Step2での分析をもとに、どの学習活動がどのような『学びうる内容』につながるか、ということを考え、『学びどころ』を整理していく。「～することで〇〇への理解を深める」という形で単元の山場をイメージしていくのである。そして、それをどのような順番で展開していくかを考え、単元全体の流れを組み立てていく。

研究内容2 子どもが主体的に課題解決に取り組み、力を身に付けられるような授業の工夫 視点③ 『学びを創り出す力』をベースにした積極的な教科関連

昨年度より、『学びを創り出す力』を子どもにわかる形で表現し、教室に掲示している。今年度はそこに整理された資質・能力について、さらに、意図的・計画的に指導していきたい。そのために、各学年の教科等の学習の、どの場面でどのように指導していくか、ということ进行分析していく。まずは、教科の担当者で、各学年の学習を見直し、『学びを創り出す力』について意図的に指導が可能な単元や学習場面を洗い出す。それをもとに、各学年の担任が子どもの実態に応じて、どの単元で指導していくか計画を立てる。生活単元・生活科・総合で培った力が他の教科等で発揮されたり、逆に教科で学んだ力を生活単元・生活科・総合で活用したりしていけるような指導を目指す。

これまでは「小単元で育てたい『学びを創り出す力』内の教科との関連については、各教科の指導事項を示す形で考えてきたが、今年度はより具体的に、教科等のどの学習と、どのような関連を図っているのか、文章で記述する形で整理していく。そうすることで、他教科等との関連について小さなことから意図的に行っていけるようにしたい。

『学びを創り出す力』をベースにした教科関連 計画例(6年) ○「単元名」(教科) ・学習場面の具体

体験的に・方法を考えて情報収集する	追究の目的を明確にもって、体験したり、他者とかかわったりしながら情報を集める。	○「討論会をしよう」(国語) ・自分の主張を裏付けるために、身近な人にインタビューをする ○「開国がもたらしたもの」(社会) ・司書の先生に相談しながら図書資料を探し調査する。
整理・分析し、判断する	目的に合わせて方法を吟味・工夫し、体験したり、他者とかかわったり、調査したりして情報を集める	○「大昔の暮らし」(社会) ・縄文時代と弥生時代の暮らしの違いについて、ベン図を活用して比較し、違いについてメリット・デメリットで分析する ○「国際平和のために、今わたしにできること」 ・『国際平和』という言葉についてウエビングで発想を広げる ○「学級目標を考えよう」(学級活動) ・ピラミッド図を使って、大事にしたいこと→まとめ→目標の順に整理する。

視点④ 思考ツール・学習集団の工夫

この研究内容の意図は、一時間の授業における、論点や情報の整理等、教師が手だてを工夫することで実現している一つ一つの過程を、子ども自身の手で行えるようにすることで、より主体的な展開を目指すところにある。すなわち、これまでの研究で大切にしてきた、一人一人がしっかりと自分の思いや考えをもち、それを臆することなく、進んで発言できる授業を目指していくことは何ら変わるものではなく、引き続きそれを目指していくことを確認しておきたい。

昨年度の意識調査を見ると、思考ツールを積極的に活用することで、子ども自身がその有用性を感じ取っている様子がうかがえる。今年度も継続して学習の中での効果的な方法について考えていきたい。具体的には、次のような視点をもって意図的に活用していく。

- ①一時間の授業で期待する変容に向けて、どのような流れや構造で思考することが適切なのか
- ②その思考の流れや構造に合った思考ツールは何か

③どのような形（板書 or ホワイトボード or ワークシート or…）で取り入れるのか

これらの視点について、部会での検討や板書計画等で共有することで、その効果や活用の仕方について考えていきたい。思考ツールについては、教師自身がその意味や使い方を理解していることが欠かせない。研修等で積極的に取り上げ、共通理解を図ってきたい。

前述の視点③に関連して、学習集団の在り方についても、考えていきたい。具体的には次のようなケースが考えられる。

学習集団の形態と目的

個	<ul style="list-style-type: none">・ワークシート等を活用して、自身の考えを整理する。・学んだことをもとに、感じたことや考えたことを振り返る。
ペア	<ul style="list-style-type: none">・自身の考えを言語化して表現することで、確かなものにする。・説明することによって、意見とその根拠を明らかにする。・自身の意見と比較しながら聞き、考えを補完したり、見つめ直したりする。
グループ	<ul style="list-style-type: none">・互いの意見を可視化、操作化しながら話し合うことで、自身の立場を捉え直したり、論点を明確にしたりする。・多様な意見に触れながら、自身の考えの根拠等を深め、確かなものにする

このような個や小集団での学習は、まずは、みとりをもとに教師が適切に取り入れられるようにしていくが、最終的には、その意味や効果を子ども自身が理解し、自ら授業の流れの中で必要と感じた場面で求めていけるようにしていきたい。